

Johannes Hegyi S. J.      *Die Bedeutung des Seins bei den  
klassischen Kommentatoren des heiligen Thomas von Aquin,  
Capreolus, Silvester von Ferrara, Cajetan*

Verlag Berchmanskolleg, 1959

柏 木 英 彦

本書は Berchmanskolleg で出している叢書 Pullacher Philosophische Forschungen の第4巻である。

ハイデガーによるとヨーロッパ哲学は「存在の忘却」として特徴づけられる。本質哲学の特徴は存在者を対象とし、存在そのものを問題としないことであるが、著者によるとヨーロッパの本質哲学の長い系列の中でトマスは例外である。トマスが本質主義者でないことを理解するために、トマスの体系の中心を成す存在と本質との実在的区別の重要性が強調されなければならない。そしてトマスにおいて esse (存在) は単に *existere, extra causas ponitur* を意味するのではないというのが著者の根本的な立場である。トマスの初期の著作「存在と本質について」では esse は *actus* として示されているが、後期の著作では esse は *perfectio, formale, actualis omnis formae vel naturae* 特に *perfectio omnium perfectionum* としてとらえられている。esse は *perfectio* であり、この存在の完全性への参与によって他の完全性が成立するのであるが、この esse を単に *existere, est* (がある) とすると、存在と本質の実在的区別は無意味となる。多くのトミストが実在的区別を主張しながら、esse において単に *existere* の意味しかみていないのは驚くべきことである。著者は以上のようにトマスの esse を理解している。この点について、レイマケル、ガイガー、ファプロ等に負うところが多いようである。〔なおトマスの存在に関する著者と同様の解釈を L. Oeing-Hanhoff が *Ens et Unum convertuntur*, 1953 で詳しく述べている。トマスの esse が *existere* でないことは山田晶氏によって(哲学研究第435号～443号)徹底的に論究されている〕。トマスのこの根本的考えを以後のトミストがどの程度自分のものとしているかが本書で追究されるのであるが、著者はトマス解釈者として歴史的に重要な地位を占めるヨハネス、カブレオルス、シルヴェステル、フェラリエンス、カエタヌスの三人を選び、それぞれ一章を当てて考察している。各章ともはじめに

生涯と著作について簡単に述べられ、次に *esse* について、最後にこの適用としてアナロジア、ペルソナについて扱われている。

まずカブレオルスであるが、彼は *Defensiones I. d. VIII. q. I. a. I.* で *esse* を扱い、トマスの命題集注釈 *I. d. 33, q. 1, a.1* に基づいて *esse* の三つの意味 (1) *ipsa essentia* (本質) (2) *actualitas essentiae* (存在) (3) *copula* を挙げている。トマスは他の箇所でもこの三つの区別を述べているとカブレオルスは云っているが、実際にはトマスで第2と第3について述べられているところはあっても、三つ挙げられている箇所は他にない。カブレオルスでは *esse* に第1と第2の両方の意味があるが、トマスでは *esse* はもっぱら第2のもの(存在)を意味する。この点カブレオルスには本質主義的傾向がある。しかし存在と本質が実在的に同一とされているわけではなく、両者は *actus* と *potentia* のごとく実在的に異なる。形相と存在との関係についてカブレオルスは *esse quod est per formam* という表現をしている。形相は *improprie* にはあるが、存在の原因である。カブレオルスの意図から考えると、*esse* にはまず存在の意味が帰せられる。そしてこの *esse* はしばしば *actualitas, actus, actualissimum* として示される。トマスはたとえば「対異教徒全書」で存在を *perfectio perfectionum* としてとらえている。カブレオルスは用語上当時の習慣で *esse existentiae* を用いているが、これが単に *existere* を意味することを拒否し、トマス自身における存在概念の発展にしたがって、存在を *perfectissimum* としている。*esse* の種々の意味の中で最も重要なのは存在であり、たとえ存在が本質から独立でないとしても、両者の関係は因果関係ではなく、*actus—potentia* の関係である。カブレオルスは *esse* の三つの分類を繰り返し用いているが、存在についての根本的な考えにおいてはトマスと一致している。ペルソナに関して、カブレオルスは *esse* を *ratio personalitatis* としているので、この点でもトマスに一致している。

フェラリエンスが *esse* について詳しく述べているところはないが、彼の「対異教徒全書注釈」から読み取れるところでは *esse* は *est* (がある) によって表わされるものを意味する。そして彼において *esse* は *actualissimum* であり、*perfectissimum* である。*esse* が他のすべての *perfectio* を含み、他の *perfectio* の根源であるとする点で、フェラリエンスはトマスと一致している。*esse* と *vivere* の完全性の問題についてフェラリエンスは、*in concreto* には *vivere* は *esse* を含むから *esse* より完全であるが、*in abstracto* には *esse* の方が完全であるとしている。ここで *esse* は抽象的と考えられているので、この点はトマスの

ない。次に *esse* の *perfectio* が形相に由来すると考えられている箇所がある。存在と形相との関係について *esse primo et per se consequitur formam, esse est per formam, esse est effectus formalis formae* 等の表現から明らかなようにフェラリエンスは両者を形相因の関係としている。形相は本来的な作用因として示されてはいないけれども、作用因 (*causa efficiens*) にかなり近いものになっている。形相の重要視はたとえばトマスの *Nobilitas uniuscuiusque rei est sibi secundum suum esse* を注釈して、この後に *id est secundum formam* …と付け加えていることから明らかである。トマスと比較した場合、フェラリエンスは形相因を強調しすぎている。トマスでは存在に対して、本質は受容するものとして *actus—potentia* の関係にあり、これは原理の問題であって、分離し得る要素ではない。フェラリエンスも本質を自立する基体であると云ってはいないが、本質が原理であって存在者でないことについて明確でない箇所がある。

アナロジアについてフェラリエンスは *analogia proportionis* が *analogia proportionalitatis* の究極的基礎であるとし、アナロジアを存在の分与説と結びつけることによってトマスを深く理解した。

一方ペルソナ論では *ratio personalitatis* が本質の領域に属すとされている。ペルソナは存在によって現実化される以前にすでに完全に構成されているので、存在はペルソナの内的構成原理とされない。この点トマスと異なる。要するにフェラリエンスは存在を *perfectissimum, actualissimum* として示す限り、トマスと一致しているが、一方存在が抽象的であり、形相に由来すると主張しているような箇所があり、存在と本質との関係において本質を強調しすぎているので、本質主義的傾向もみられる。

トマスでは存在の考え方に発展があるが、カエタヌスでは存在の問題と関係のある初期の著作と後期の著作においてトマスにおけるような変化がみられるかどうかの問題である。カエタヌスは「命題集注釈 I d. VIII, q. 1, a. 1」でカブレオルスと同様に *esse* の三つの意味を挙げている。トマスと同様、カエタヌスもその後の著作ではこの三つの分類に言及していない。しかしトマスの場合は *esse* の本質としての意味が排除されたからであるが、カエタヌスの場合は *copula* としての意味が他の二つの意味と一緒に挙げられることはないとしても、本質としての意味は後期の著作でも依然として保持されている。「存在と本質注釈」では用語上トマスの *esse* の代りに *esse existentiae* あるいは *existere* が用いられ、存在は *actus* としてよりも、むしろ *esse existentiae actualis* として示される。存在

と本質の関係に関する箇所では用語上の相異はあるにしても、表現の内容は同じであるかどうかということは決定しがたいが、トマスの *esse* と異なっていることを示すところもある。*esse existentiae* は、本質を実在的に存在せしめるものとして示される。カエタヌスにおける存在は用語の上ばかりでなく内容的にもトマスと異なり、或るものが「ある *est*」という事実を意味する。「命題集注釈」では *esse* はしばしば *actus* として示されるが、次第にトマスの *esse* の意味は失われ、「存在と本質注釈」では *actus* としてはほとんど示されなくなる。「神学全書注釈」でも *esse* は「*est*」によって表わされるものの意味である。*esse* が *actus* とされているところもあるが、トマスが *esse* をさらに *perfectio* として示している箇所でも、カエタヌスは「*est*」の意味しか与えていない。*esse actualis existentiae* は本質の「*exercet existentiam*」をひき起すものにすぎない。カエタヌスで *esse* が *perfectio* として強調されている唯一の箇所は「存在と本質注釈」第6章であるが、この箇所はトマスの対異教徒全書 I, 28 の引用にすぎず、カエタヌス自身がトマスの *perfectio* としての *esse* を自分のものにしていったという証拠とはならない。また神学全書 I, q. 4, a. 2 及び同 I, q. 44, a. 1 における存在は *perfectio* であるというトマスの基本的考えに対してカエタヌスはなにも述べていない。次に *esse* と *vivere* の完全性については、*formaliter et praecise* に考察すると *esse* は *vivere* より完全であるが、*absque praecisione* に考察すると *vivere* は *esse* より完全であるというのがカエタヌスの見解である。トマスと異なり、カエタヌスにおいては *perfectio perfectionum* としての存在は抽象的である。トマスにおける *esse* は、それに他のあらゆる完全性が参与するところの完全性であるが、カエタヌスにおけるごとく、*esse* が単に「*est*」「*existere*」の意味しか持たないとすれば、*esse* への参与ということは意味がない。*perfectio* としての *esse* に言及する必要のある場合でもカエタヌス自身の確信を示すような叙述はない。カエタヌスのこの立場は、彼の *esse* が「*est*」「*existere*」を意味すると考える場合にのみ理解できる。

アナロジーについては創造物の領域たとえば実体と偶性の間には *analogia attributionis* が認められるが、神と創造物との間には *analogia proportionalitatis* だけが存在に関してのみ認められる。これはトマスの考えと対立する。トマスは神学全書 I, q. 13, a. 5 で神と創造物との間の *analogia attributionis* を述べ、しかも存在に関してのみでなく、その他のものにもこれを認めているが、カエタヌスはこの明瞭な叙述を回避しようとしている。カエタヌスは *analogia attributionis*

を外的 (*externa*) としているが、神と創造物との間の存在は「外的命名」の意味で類比的なものではない。*analogia proportionalitatis* は本質の秩序では有用であるが、存在の秩序では問題解決に役立たない。神と創造物との存在関係を *analogia proportionalitatis* によって示そうとすれば、存在問題は結局本質の秩序に押しやられることになる。

次にペルソナの問題についてはカエタヌスが見解を変更したかどうかで意見が分れている。「存在と本質注釈」と「神学全書 I 注釈」では *ratio personalitatis* は存在とされているが、「神学全書 III 注釈」では *modus substantialis* となっている。著者は意見の変更があったからこそ、「神学全書 III 注釈」におけるカエタヌスの結論は決定的であるとしている。そしてカエタヌスが *esse* に *existere* の意味しかみなかったとすれば、存在を *ratio personalitatis* にしなかったことは容易に理解できる。結局カエタヌスでは、存在と本質との実在的区別のごとく、トマスの存在概念を保持していることを示すところもあるが、上にみたごとくトマスのでない点が多い。カエタヌス自身は意識しなかったにせよ、本質主義的傾向はアナロジー、ペルソナの問題において明らかである。

以上を綜括すると、カブレオルスでは表現の仕方はしばしばトマスと異なるが、存在概念に関しては大体同じである。フェラリエンスでは用語はかなりトマスに近く、存在概念についてトマスと一致する点もあるが、本質主義的傾向がみられる。カエタヌスでは用語はほとんど完全にトマスと異なり、存在概念もトマスの精神から離れたものになっている。要するに時代がトマスから遠くなるにつれて、注釈家の存在把握はトマスと異なってくるというのが著者の結論である。そうすると次にトマスをよく理解し弁護しようとした注釈家にどうしてこのような事態が生じたかということが問題になるが、これについて著者は別の研究を必要とするとして、次の三点を指摘しているにすぎない。(1) トマス以後 *esse* の代りに *esse existentiae*, *existentia* が用いられるようになったが、この用語の変化とともにトマスの本来の考えが歪められてきた。(2) トマスは一般にアリストテレス主義者とみなされていた。彼の弟子ばかりでなく彼の批判者も彼をアリストテレス主義者として理解し批判しようとしたため、アリストテレスの存在概念とトマスの存在概念が混同されることになった。(3) トマスによると人間知性の固有対象は *quidditas*, *natura* である。しかし *esse* は本質の秩序に属さないから認識の固有対象とならなかった。著者が挙げている以上三つの理由のうち特に (3) などはお実証的説明がないと納得しがたいように思われる。

本書は全体としてやや追究の足りない感があり、カエタヌスの場合などいくつかの問題が残る。殊にアナロジアについてはトマス解釈をめぐって異論が生ずるのであるが、叙述のあまりに簡単なのが惜しまれる。ともあれ本書は論旨が明解であり、他に類書のない折から有益な研究書である。

哲学大辞典 4 卷, 1957~1958, ガララーテ哲学研究所編 ヴェネチア・ローマ。

Enciclopedia Filosofica. Centro di Studi filosofici di Gallarate.

VeneziaRoma (Istituto per la Collaborazione Culturale) 1957—1958, 4 vol. (19.5×28cm) : I pp. XXVII, 1958 col., II pp. XIX, 1916 col., III pp. XIX, 1942 col., IV pp. XIX, 1963 col.

Francisco Pérez Ruiz S. J.

此の著作の対象は、既に表題から分るように、単に中世哲学だけに限られるのではない。しかしこの辞典には中世哲学に属する多くの重要な要素があるので、私は中世哲学の観点から書評を行うことを妥当と判断した。この著作全体についての概観は雑誌「ソフィア」の秋季号にすでに書いたもので、ここでは中世哲学と関係する面のみを扱う（ソフィア秋季号1960年344—348頁参照）。

この大きな辞典の監修者 P. Carlo Giacon S. J. (メッシナ市大学形而上学教授) は、イタリアの著名な新トミストである。従ってこの辞典の中世哲学に関係あるすべての問題が充分の注意と配慮とをもって扱われることが予期されたが、実際にこのことは事実となった。すなわちこの辞典の中には、歴史的問題にしても学説的問題にしても中世哲学研究のために重要な多くのものが見出される。そして更に個々の問題のために選択された文献目録が示され、それはイタリア語の書物・論文に限らず、英・仏・独・スペイン語のそれに及んでいる。この辞典の著者たちは、その担当する問題について、それ以前に包括的な著作を書いている場合が少なくない。かくて彼らは、長い研究の結果を集約して我々に示している。

この辞典の配列は多くの辞典のそれと同じである。アルファベット順に、二つの種類に分けられる項目が並んでいる。一つは直接に哲学的問題を考えるもの。